53　嘆(なげ)きつつ　一人寝(ひとりぬ)る夜(よ)の　明(あ)くる間(ま)は　いかに久(ひさ)しき　ものとかは知(し)る

ふじわらのみちつなのはは
藤原道綱母



月

〈声に出してよんでみよう〉

ナゲキツツ　ヒトリヌルヨノ　アクルマウ

イカニヒサシキ　モノトカウシル

〈どんな意味(いみ)だろう〉

嘆きながら、一人で寝る夜の明けるまでの間は、

どんなに長いものか、あなたは知っているかしら。

いいえ、きっと知らないに違いない。

（知っていたら、私にこんなつらい思いをさせられるはずがないもの。）

＊「かは」は、反語(はんご)を表します。反語とは、「･･･だろうか、いや、そんなことはない」というように、疑問の形で問いかけておいて、強く打ち消す、否定の強調表現です。

〈解説〉

平安時代の結婚は、男性が女性の家に夜通って来るという「婿通(むこがよ)い婚(こん)」の形態をとっていました。一人の男性が複数の妻を持つことも、普通に行なわれていました。夫の足が遠のけば、自然に離婚は成立します。夫の訪れを待つことしかできない不安定な立場の女性の嘆きは、この時代、いくつもの歌に詠われています。中でも、これは有名な一首です。

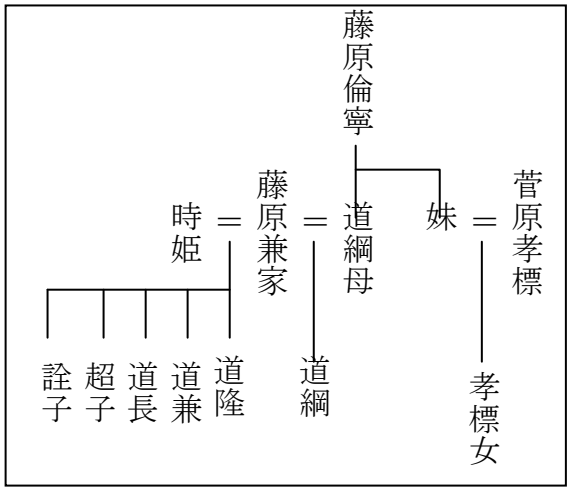
時代は変わり、待つ一方の受動的な女性像は過去のものとなったような現代ですが、恋人の訪れを待ちわびる気持ちや、会えずに過ごす一人の夜の長さ・切なさは、やはり、古今(ここん)東西(とうざい)、変わらないのではないでしょうか。

〈作者と出典〉

この歌の作者は、平安時代中期、十世紀頃の女性です。本名は不明。父は、藤原倫寧。中流貴族の家柄でしたが、美貌と和歌の才能が評判となり、当時政権を握っていたトップ・エリートの家柄の藤原兼家と結婚、息子の道綱も誕生しました。しかし、作者との結婚前から、兼家には、時姫という妻がいて、子女も大勢生まれていました。また、その他の妻や愛人も少なくなく、作者は、気持ちの休まる時がありませんでした。

その、結婚生活の嘆きを克明につづった作品が**『蜻蛉日記』**で、女流日記文学の先駆と呼ばれ、また、緻密な心理描写が、平安文学の最高峰とされる『源氏物語』[1]にも大きな影響を与えたと言われています。

また、平安時代後期に成立した『更級日記』の作者である菅原孝標女は、道綱母の姪にあたります。



道綱母人物関係図（＝は婚姻関係）

夫との気持ちのすれ違いに疲れ果て、自尊心も傷つけられた作者は、息子の道綱の成長に生きる希望を託すようになりますが、道綱は凡庸な人物であったらしく、政権は、時姫の息子たちである道隆・道兼・道長へと受け継がれていったのでした。

「嘆きつつ」のこの歌は、『蜻蛉日記』の他、３番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『拾遺和歌集』（1006 頃成立）にも収められています。

---

[1] 作者は、紫式部（→「57 めぐり逢ひて」）です。